そして少年は海を渡った
—伊東マンシヨ渡欧八年の意味するもの—

日向学院高等学校教諭

竹村茂紀

目次

はじめに

一 伊東マンショについて

マンショの出自

「正使」マンショ

二 遣欧使節について

使節派遣の目的

使節と貿易

おわりに

はじめに

十六世紀に、一〇代半ばの少年がローマへ渡り、ローマ教皇との謁見を果たした。この出来事は、いまだに多くの人に憧れやロマンを抱かせるようである。「天正遣欧使節」や「伊東マンシヨ」という言葉を、社会科の授業で教わった事項として記憶にとどめている人もいるだろう。また、四〇〇年以上も前に成し遂げられた大航海は、それを美談として人々にとらえさせるに十分な出来事といえるかもしれない。

この出来事については、中学・高校の社会科教科書に記載されているため、多くの人が耳にしたことがある。では、教科書にはどのように書かれているのであろうか。

まず、中学教科書から見ると、「キリスト教の広まり」という小見出しに続いて、

ザビエルが去ったのちも、宣教師が貿易船に乗ってきて、布教に努めました。貿易の利益に着目した九州各地の大名は、南蛮船が領内の港に来ることを許し、なかには、キリスト教の信者（キリシタン）になる者もあらわれました。一五八二年には、大友宗麟ら九州の三人のキリシタン大名が、四人の少年を、使節としてスペイン国王とローマ教皇のもとへ派遣しました。

と書かれている。

高校日本史教科書では、記述が詳細になり、「南蛮貿易とキリスト教」という小見出しに続いて、

戦国大名のなかにも、キリスト教の信仰にひかれ、改宗する者もあらわれた（キリシタン大名）。また、南蛮貿易の利益を求めて、キリスト教の保護を行う者も多かった。このようにしてキリスト教は、西日本などのキリシタン大名の領国でさかんになった。一五八二（天正一〇）年、キリシタン大名の大友義

鎮・大村純忠・有馬晴信は宣教師ヴァリニャーノのすすめにより、伊東マンシヨら四名の少年を使節としてローマ教皇のもとに派遣した（天正遣欧使節）。

脚注：伊東マンシヨ・千々石ミゲル・原マルチノ・中浦ジュリアンを派遣した。彼らは一五九〇（天正十八）年に帰国したが、このときには秀吉のバテレン追放令が出ていた。

また、別の高校日本史教科書には、同様の小見出しに続いて、

その後、宣教師はいいついで来日し、南蛮寺（教会堂）やコレジオ（宣教師の養成学校）・セミナリオ（神学校）などをつくって布教につとめた。ポルトガル船は、布教を認めた大名領に入港したため、大名は貿易をのぞんで宣教師の布教活動を保護し、なかには洗礼を受ける大名もあった。彼らをキリシタン大名とよぶが、そのうち、大友義鎮・有馬晴信・大村純忠の三名は、イエズス会宣教師ヴァリニャーノのすすめにより、一五八二（天正一〇）年、少年使節をローマ教皇のもとに派遣した（天正遣欧使節）。

脚注：伊東マンシヨ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノの四少年が派遣され、ゴア・リスボンをへてローマに到着し、教皇グレゴリウス十三世に会い、一五九〇（天正十八）年に帰国した。

と、記されている。ここで共通していることは、次の通りである。

①大名たちが、貿易の利益に着目し、宣教師の布教活動を容認したこと。

②当初、貿易の利益に着目していた大名たちであったが、中には、教義に感銘を受け、キリスト教に改宗するものもあらわれたこと。

③キリシタン大名が、ヴァリニャーノのすすめにより、少年たちをローマに派遣したこと。

④四人の少年たちについては、中学教科書には記載はなく、高校教科書においても、脚注で触れられていること。

教科書では、南蛮貿易とキリスト教布教の関係については、小見出しにもなっていないとおり考慮されている。しかし、遣欧使節を三名のキリシタン大名がヴァリニャーノのすすめにより派遣したと述べられており、使節は宗教的に感銘を受けたキリシタン大名により立案され、実行されたと読み取れる。

遣欧使節について語る際に、少年たちの行動を高く評価するきらいがあるが、少年たちがどのような出自で、どのような過程で選ばれたのかは、あまり注目されていない。むしろ、美化されたイメージばかりが先行しているように思える。

特に、少年たちの筆頭にあげられる伊東マンシヨについては、なぜ彼が「正使」なのかということも含めて、十分に検証されていないのではないだろうか。また、使節派遣は、日本をはじめ、ヨーロッパの人々に対してどのような意味を持っていたのか、などについて意外と知られていない。

本稿では、まず、遣欧使節の「正使」とされる伊東マンシヨの出自と、使節の一員に選ばれた過程について考察する。

次に、巡察師ヴァリニャーノに注目し、彼がどのような意図をもって遣欧使節を立案したのかを考える。

さらに、従来遣欧使節は、その宗教的側面ばかりが強調されてきたが、大航海時代におけるスペイン、ポルトガルの海外戦略の一つとして、遣欧使節がもつ意義についても言及したい。

一 伊東マンシヨについて

マンシヨの出自

伊東マンシヨの出自については、疑問視される点が多い。

マンシヨは遣欧使節の正使、大友宗麟の名代としてローマに派遣された。マンシヨが選出された理由は、宗麟の名代として相応しい出自と人格を備えていると判断されたからだと思像できる。

しかし、彼の出自については、不明な点が多い。

日本に残されている史料からは、ほとんど彼の姿を浮かび上げることができない。宮崎県東諸郡国富町にある法華嶽薬師寺の天井板に書かれている、伊東祐青が子どもたちの無病息災を願って奉納した言葉の中に、虎千代鷹という子供の名前が出てくるが、それがマンシヨの幼名なのではないかといわれている程度である。

マンシヨの没年は、イエズス会の記録に残っており、はっきりしているが、生年ははっきりしていない。薬師寺天井板に祐青が書き記した天正三年に幼年であったことなどから推測し、一五六九（永禄一二）年頃生まれたとされている。

それでは、ヨーロッパ側の史料では、マンシヨの出自はどのように書かれているのであろうか。

ここで三人の神父が述べた、マンシヨの出自について検討したい。

一人目は、遣欧使節を企画し、マンシヨを使節の一員に選出した巡察師ヴァリニャーノである。ヴァリニャーノは、マンシヨの出自について「アポロジア」という文章の中で、次のように述べている。

ドン・マンシヨは豊後の大名の甥ではなく、彼の甥である日向の大名の従兄弟で、日向の老大名の孫、すなわちその大名の娘と同じ日向の大名の家族の一武士の息子であった。日向の大名は伊東家であり、従って伊東ドン・マンシヨと呼ばれる。

ここで、ヴァリニャーノが、何のために「アポロジア」第五章を書いたのか、にまず注目したい。マルティノという神父が遣欧使節について、「この栄えある王子たちが誰であったかは、よく知られています。すなわち彼らは貧しい若者にして平民の息子で、もしイエズス会の修道服を受け、修道会に入らなかつたならば、今では少しの米を食するにもお金がなかつたでしょう。彼らの中で一人だけが豊後王の甥で、彼も他の者も王でも王子でもなく、日本の王たち

とは関係ありませんでした」と、述べているのだが、これは、ヴァリニャーノが主張するマンシヨの出自には偽りがあり、よって遣欧使節にヨーロッパの人々は騙されたのだという批判であった。ヴァリニャーノにとって、このような批判は、とても容認できるものではなく、マルティノに反論するためにこの章を書いたのである。

つまり、「アポロジヤ」第五章は、マンシヨたちが使節として選ばれたことの正当性を主張することに主眼がおかれていっているといえる。もしこの章で、ヴァリニャーノが述べるマンシヨの出自に間違いがあれば、それはマンシヨが使節に選ばれたことの正当性を失わせ、さらにはそのような人物を選んだヴァリニャーノ自身の地位をも失わせる危険性をもっているのである。よって、ここで述べられているマンシヨの出自は、ヴァリニャーノが「マンシヨの正確な出自」と信じていたものと考えることができる。

しかしながら、一五八三（天正十一）年十二月十五日に、インドのゴアからローマ教皇グレゴリオ十三世に送った書簡には、「それらの少年たちのうちの一人は「伊東マンシヨ」日向の国王の甥であり、また豊後の王の親族でもある。」と書かれており、豊後王の親族であるとヴァリニャーノは教皇に伝えている。

「アポロジヤ」第五章によると、大友宗麟と伊東マンシヨの間には、血のつながりはまったくない。「日向の大名の家族の一武士の息子」であると述べている。しかし、教皇への手紙では、宗麟とマンシヨは親族であると書き送っている。マンシヨの父親は伊東祐青、母親は伊東義祐の娘である町上であると言われている。もしそれが正しいとすれば、教皇へ送った書簡は、明らかに間違っている。大友宗麟の名代として送り込んだマンシヨが、宗麟と血縁関係もない少年であるということになれば、遣欧使節の価値が低下すると危惧したヴァリニャーノが、「マンシヨは、宗麟の親族である」とわざわざ記したのではないだろうか。

次に、マンシヨたちとともに、使節の引率者として八年間行動を

ともにしたデイエゴ・デ・メスキータは、マンシヨについて、次のように述べている。

巡察師とローマへの旅に同行するため選ばれた人は次の通りである。豊後のフランシスコ王の代理人は伊東ドン・マンシヨ、日向の国出身、日向の大名の孫、すなわち大名の娘と身分の高い武士の息子。豊後の大名とマンシヨの間には親戚関係はあまりなく、ただ、ドン・フランシスコの妹の一人がマンシヨの母の兄弟と結婚しているだけである。

そして、三人目として、ラモンの書簡を見てみよう。マンシヨの出自について疑問を呈したラモンの書簡は、あまりにも有名であり、この書簡の発見によって、マンシヨの出自が議論されるきっかけになったものである。ラモンは次のように書き記し、遣欧使節に疑義を抱いている。

陛下はご存知のことと思うが、彼らがどのような人物か簡単に記述してみたい。御地でドン・マンシヨ（伊東）と呼ばれていた者のことは、私は非常によく知っているが、彼がフランシスコ王という名の豊後の屋形の姉妹と結婚していた日向の屋形（伊東氏）の親戚であることは真実で、したがって豊後王の甥でもなく、何かそういった縁者でもなかったし、また現在もそうではなく、いわば親戚の親戚だといえる。

三人の神父が指しているマンシヨは、果たして同一人物なのだろうか。ヴァリニャーノとメスキータの共通点は、マンシヨは日向の大名の孫、つまり、大名の娘と武士の息子ということである。この証言と、『宮崎県史』にある系図を比較すると、日向の大名は伊東義祐、その娘は町上、町上の夫でマンシヨの父は祐青ということになる。この点に関しては、一人の神父の証言と、系図に矛盾はない。

次に、大友との関係であるが、ヴァリニャーノは「マンシヨは豊後の大名の甥ではなく、彼の甥である日向の大名の従兄弟」と書き

ている。ここでいう「彼（宗麟）の甥である日向の大名」とは、誰を指すのであろうか。『宮崎県史』の系図を見ると、宗麟の甥は、一条兼定である。兼定は土佐一条氏の一条房基の子であり、日向の大名ではない。ましてマンシヨは一条兼定の従兄弟とはいえない。

さらに、メスキータは「フランシスコの妹の一人が、マンシヨの母の兄弟と結婚している」と述べているが、これも系図を見ると、マンシヨの母（町上）の兄弟（義益）は、フランシスコ（宗麟）の姪と結婚しているのであって、妹ではない。この点は、ラモンについても同様である。ラモンは「彼がフランシスコ王という名の豊後の屋形の姉妹と結婚していた日向の屋形（伊東氏）の親戚である」と述べているが、先に触れたように、伊東氏は宗麟の姪と婚姻関係を結んでいる。

ここで重要なのは、三人のうち、誰がマンシヨの出自を言い当てているかを決めることではない。現存する史料からは、マンシヨの出自を正確に立証することは非常に困難なのである。遣欧使節を企画し、マンシヨを選出したヴァリニャーノ、マンシヨとともに八年にわたって行動をとらしたメスキータ、そして「マンシオは、前述のようにさげすまれて豊後を放浪していたところを、教会で憐れに思って迎え入れた。それは私が豊後の都市、府内にいた時のことであって、そこで彼は私の所に連れてこられた。そこで直ちに私は頭から足まで衣服を身につけさせた」と語るラモンという、マンシヨに近い立場にいた神父たちが、マンシヨの出自について、一致した見解を持っていないことに注目したい。特に、遣欧使節を肯定的に評価しているヴァリニャーノとメスキータでさえも、マンシヨの出自を正確には知っていなかったのではないかという可能性が出てくるのである。

遣欧使節の「正使」として、大友宗麟の名代としてローマ教皇に謁見したマンシヨは、実はその出自がはっきりしない人物なのである。

「正使」マンシヨ

それではなぜ、マンシヨが遣欧使節の「正使」として、ローマに派遣されたのであろうか。また、そもそもマンシヨは、いつ遣欧使節の一員に選ばれたのであろうか。

大友宗麟より、イエズス会総会長へ送られたといわれる書簡に「：然者吾等いとこ日向之伊藤せらふにも、此度備慈多道留御供可仕候処、当時遠国江居住之間無其儀候、併彼いとこまんしよ渡海申候間」とある。「せらふにも」とは、ジェロニモのことであり、伊東義益の息子祐勝である。この書簡が、宗麟によるものかは問題があるのだが、伊藤（伊東）ジェロニモがピジタドル（ヴァリニャーノ）とともにローマへと赴くはずであったが、遠国にいたため、従兄弟のマンシヨを赴かせたと書かれている。

また、天正一〇（一五八二）年二月に、コエリュがイエズス会総会長に宛てた書簡にも「他の一人は豊後の国主の甥で日向の国主の子となるはずであったが、都から時期に間に合うよう来ることができぬため、彼の従兄弟であり日向の老国主の孫にあたるものを代わりとした」と書かれている。

ジェロニモこと伊東祐勝は、大友宗麟がヴァリニャーノに、安土の神学校に連れて行くようにと託された者であった。

祐勝は、伊東義益と阿喜多という女性の間生まれた。阿喜多の母は宗麟の妹、父は土佐一条氏第三代当主である一条房基である。祐勝は、ヴァリニャーノが遣欧使節を企画した時に、一員として候補に挙げられたのだが、安土の神学校にいたため、出航の時間に間に合わなかった。そのため、ヴァリニャーノは、祐勝の代理として、マンシヨを連れて行ったということが、史料からわかる。

つまり、最初は祐勝が使節の一員であったのだ。彼は大友宗麟とも血のつながりがあるばかりでなく、一条氏の血も受け継ぐ者であった。宗麟の名代として、教皇に謁見するに十分の出自であると見えよう。さらに、幼くして安土の神学校で教育を受けており、

ヴァリニャーノが、祐勝を選抜しようとしたのは当然のことであつたといえる。コエリュも「年のころ十四歳の彼の弟には洗礼を授け、巡察師は信長の主要な市である安土山の神学校に彼を入学させた。既述の通り、遅れず都から到着していたならば、他の人たちと共にローマへ行くはずであつた少年はこの人である」と書いており、祐勝が使節の一員としてふさわしいと考えられていた。

しかし実際は、祐勝ではなく、マンシヨがローマへと向かつた。これらの書簡により、マンシヨは遣欧使節正使として当初から選ばれていたのではなく、祐勝の代理として選ばれたことがわかる。遣欧使節を語る際には、まず伊東マンシヨの名前が挙げられるのだが、そのマンシヨは、出発に間に合わなかつた人物の代理として派遣されたのであつた。

そうであるなら、ここで一つ大きな疑問が出てくる。遣欧使節を企画したヴァリニャーノは、いつこの使節を立案し、少年たちをローマに送つたのだろうか。

一六世紀に、日本からローマに少年を派遣するという壮大な計画を実行するには、多額の資金と、周到な計画、多くの人の協力が必要である。ローマ教皇に謁見させる少年たちの人選にも、長い時間がかけて当然である。

しかしながら出帆に間に合わなかつたため、当初予定していた祐勝ではなく、マンシヨを使節の一員として派遣した。このことは、遣欧使節の計画が、短期間のうちに少数の神父たちによって行われたことを示しているのではないだろうか。もし、周到な計画が立てられていたのであれば、祐勝は出帆に間に合うように長崎に到着していたはずである。

ヴァリニャーノは、長崎から少年たちとローマに向かう前に、畿内を訪れている。そのときすでに、遣欧使節の計画が頭にあつたなら、ヴァリニャーノが九州に戻ってくる際に、祐勝を連れてくることもできたはずである。しかし、ヴァリニャーノは、祐勝を連れて

戻らず、出帆の時にマンシヨを連れて行つた。長崎に来る予定であつた祐勝に何らかの事情が生じて出立が遅れたのであろうか。

ヴァリニャーノは、一五八一年三月から八月にかけて、畿内に入り、安土で織田信長と会見を行っている。そして一〇月に豊後に戻り、天草を経て、長崎に戻つた。

メスキータも、書簡の中で「巡察師は、堺からの帰路用いたのと同じ船で、豊後から肥前国にある長崎まで行つた。ここでナウが中国に向かつて出発するのを待ちながら二ヶ月を過ごした」と書いている。

ヴァリニャーノが、長崎を出発する半年前に遣欧使節を企画し、祐勝をその一員として選抜する意思があれば、安土から長崎に戻ってくる際に、彼をつれてくるべきであつたはずである。安土の神学校には、祐勝とメスキータがいた。ヴァリニャーノが安土を離れるときに、祐勝は安土に残り、メスキータはヴァリニャーノとともに安土を出立している。祐勝は、長崎に来る予定はなかつたのである。何らかの事情が生じて出立が遅れたわけではなかつたのである。このことから考えても、遣欧使節の計画は、ヴァリニャーノが長崎に戻つてから立案されたといえるのである。

また、一五八二年一月に長崎で行われた日本宣教師会議において、使節のことが議題に上つた形跡がまったくない。すなわち、このことから、使節の計画は、長崎出発の一ヶ月ほど前になつてから、急に立案されたものであると考えることができるのである。

さらにこの点について、大友宗麟からイエズス会総会長にあてられた書簡に焦点を当てて考えてみる。

渡辺澄夫氏は、宗麟の花押の違いから、総会長あての書簡が宗麟によるものではないことを明らかにした。また、松田毅一氏は、「ヴァリニャーノは、一月二〇日前後、大村純忠に告別に赴いたところ、少年使節のことを急に思い立ち、純忠に計つてその賛意を得、一月二七日付で五通の書状を受け、次いで有馬晴信を訪ねて二月八

日付の書状を得、豊後の大友宗麟には議する暇なきまま、事後承諾を求めることにして、当時、有馬領にいた四人の少年を選定して使節とし、二月二〇日に出発したと解してよいであろう」と述べており、純忠に使節のことを本当に話したかはともかく、宗麟には豊後を訪れて、事前に宗麟の承諾を得る時間的余裕もなかったとしており、この書簡は、宗麟によるものではないと考えている。

両氏の主張を踏まえたいえで、ラモンの書簡を見てみよう。ラモンは、使節派遣の決定について、次のように書いている。

パードレ・アレッサンドロ（ヴァリニャーノ）が長崎滞在中、乗船の恐らく二〇日か三〇日ほど前に例の少年たちを御地に派遣することを決めていたということだけで充分である。この決定があまりに突然で、急のことであつたので、同師は、豊後の修練院にいた一人の京都生まれのイルマンを同行させたいと思つたが、彼を呼びにやるだけの時間がなかつた。：そのようなわけでフランシスコ王すなわち豊後の屋形は自分の使節としてマンシオを派遣することなどまるで考えもせず、一行が出発するまで、マンシオが他の人々と一緒に旅立つなどということとは気にもかけず、知りもしなかつたほどである。：記憶違いでなければ、このことについて彼と話し合つた時に、彼が私に、何のために少年たちをポルトガルに送るのか、と尋ねたので、私は、それは日本人たちに彼地を見せるためである、と答えた。：このような使節を派遣するなど豊後王は考えもしなかつたし、そのような書翰も認めなかつた、ということを私は確かに知つてゐる。

ヴァリニャーノとラモンが対立していたとはいへ、宗麟の聴罪師であつたラモンのこの発言は、無視することはできない。花押の違い、豊後から長崎までの距離、書簡の日付、そしてラモンの証言から考えて、遣欧使節はイエズス会本部からの要請でないことはもちろんのこと、日本にいる宣教師たちの総意でもなく、ヴァリニャー

ノ個人か、彼の周辺にいたきわめて少数の神父たちによつて立案され、実行されたものだったのである。

以上のように、われわれが中学や高校の教科書で学んできた遣欧使節は、周到に立案されたものでもなく、ローマのイエズス会から要請があつたものでもなく、ヴァリニャーノが日本を離れる直前に思い立つて実行に移されたものであつた。ヴァリニャーノ自身の中では温めてきた計画であつたのかもしれないが、少なくともローマに連れて行く少年を時間をかけて選抜し、教皇やイエズス会総会長宛ての書簡を事前に用意することができないほど慌しい準備を経て、使節派遣が行われたのであつた。

また、伊東マンシヨは、遣欧使節正使として四人の少年の中では常に筆頭にあげられる人物であるが、その出自には空白の部分が多々あり、伊東祐勝（ジェロニモ）の代理として急遽選抜され、血縁関係のない大友宗麟の名代として、ローマに赴いたのであつた。それでは、遣欧使節を立案したヴァリニャーノは、この計画にどのような意図をもつていたのであろうか。その目的から見ていくことにしよう。

二 遣欧使節について

使節派遣の目的

ヴァリニャーノが、日本を離れる一ヶ月ほど前に遣欧使節を思い立ち、少年たちを選抜したということは、先に述べたとおりである。では、ヴァリニャーノは、どのような目的をもって遣欧使節を派遣したのであろうか。そこには、使節派遣の準備期間の短さからは想定できない、日本におけるキリスト教布教活動における問題が影響している。

ヴァリニャーノの書簡により、その目的を確認してみよう。

豊後の国主と右の伯叔父になる領主たちが（国王）陛下の手

と(教皇)聖下の御足に接吻して然るべき従順を表すために彼らを遣わすのであり、これは日本人がヨーロッパにおいて知られるためにも、また、彼らが我がキリストの教えの偉大なることや(教皇)聖下ならびに他のヨーロッパ諸侯の栄華と威厳を知り、貴宮廷やローマの宮廷を見て日本へ戻った後、その見聞について証言し、(日本)国民が我らの望みと教えの何たるかを理解する上で有益なものと我らには思われる。それには彼ら(少年たち)が満足して日本に帰るように恩恵を施し厚遇することが甚だ肝要である。

また、別の書簡においては、

その目的は、この者たちの名において教皇聖下の御足に接吻し、至高の司牧者たる聖下に聖服従し、また国王陛下のもとを訪れ、ヨーロッパに日本人のことを熟知してもらうためである。少年たちは、我がヨーロッパの大神たち、様々な事物についての知識を得るためにも派遣されたのである。：

私が「ヨーロッパに」赴こうと切望し、また「そうするよう」に「驅られて二つめの理由は、日本の維持のために、世俗的な救済策を手に入れることであつた。というのも、その救済策がないために、かの地方「日本」のイエズス会とキリスト教界の全体が、著しい危機に陥っているからである。：

四つめの理由は、この日本人の少年たちを「ヨーロッパまで」同道してゆくことであつた。というのも、少年たちが私と一緒に行くならば、彼らは私が切望していることの全てと、また特に日本の世俗的な救済策とを大いに助けてくれるであろう、との結論が下されたからであり、またそれは非常に確実だからでもある。：このほかにも、少年たちが我が教会と教皇聖下、および聖下の枢機卿たちの栄光を目にし、ヨーロッパの様々な都市と支配者たちの偉大さと、その富める様を目にするならば、少年たちは大いに啓発され、日本に戻った暁には、我々の事柄

に光彩を与え、名声を高めてくれるであろう。²³
と、書き記している。

これら二通の書簡により、使節派遣の目的は、次の通りであつたことがわかる。

- ①スペイン国王と、ローマ教皇に、恭順の意を表すこと。
- ②日本人をヨーロッパの人々に見せ、彼らに日本人のことを知ってもらうこと。
- ③少年たちにヨーロッパの栄華と威厳を実感させ、日本に戻ってから、そのすばらしさを伝えさせること。
- ④日本での布教活動維持のために、世俗的な救済策を手に入れること。

少年たちが、ローマ教皇グレゴリオ一三世に謁見を果たしたことは、ヨーロッパに大きな衝撃を与えたようである。教皇への謁見が、いかに華々しく、またローマ・リスボンを往復する際も、行く先々の諸侯から盛大な接待を受けたことは、よく知られていることである。遣欧使節はこの崇高な目的のために立案されたのであり、その役割を立派に果たした少年たちはいかにすばらしかったか、と彼らを高く評価し、顕彰する人は後を絶たない。派遣された者たちがまだ一〇代の少年であつたことが、一層そのような気持ちにさせるのであろう。

しかし、ヨーロッパで彼らはどのように思われていたのであろうか。盛大な歓迎を受けた記録は残っているが、それは純粹に少年たちに向けられたものばかりではなかつた。

この町の人々は、日本人たちを一目みたいと希望しているのだ、総長様からメスキータ神父にここまで来るように勧めて下さいませんか。町のほうからこのことを切に要望されていますので、総長様にお願ひします。日本人たちが来たら、確かに感化されると思うし、私たちの取り計らいによって、その望みがかなえられたのを見て、皆、私たちのこの町に対する愛を理解

するでしょう。

この書簡は、遣欧使節をわが町に招待することが、「私たちの町に対する愛を理解させる」ことになる、と述べている。つまり、日本人使節という珍しいものを招待することができる自分たちの政治力を誇示することが重要なのであって、そこには必ずしも、ローマ教皇への謁見を果たした少年たちへの敬意だけがあるのではない。ヨーロッパから遠く離れた「日本」という場所から、教皇に恭順の意を示してきた少年たちへの好奇心、そして、そのような人を自分の町に招待できる力量を誇示するために、少年たちは利用されたという側面もあったのである。

メスキータがイエズス会総会長あての書簡で

この日本人たちについて、とりわけ彼らに対する処遇と他の人々に礼節を尽くすことや、その際、彼らに不名誉にならないようにとるべき方法についてなど、ここではさまざまな対立と意見がありました。それは、ここ神父たちは皆、自分の任務と友人への顔向けに応えたく行ずることがあるので、使節たちには時には退屈となります。わたしはこのすべての事柄において、管区長アレクサンドロの決定をまもるようにしますが、当地の神父はそれに従うのを良しとせず、私を責め、私たちがこの目上の決定に従わなければならないと言っています。アレクサンドロ神父がはっきり決定した場合でも、前述のように彼らには行いません。私はひとつのことをいえることができます。アレクサンドロ神父の決定が守れなかったたばによい結果を生みませんでした。

と書いている。このように、必ずしもヴァリニャーノたちが期待した結果をもたらしたわけではなかったのである。

また、時には、神父から頼まれて出迎えをしたこともあったようである。イエズス会総会長あての書簡には、

しかし、道中は伴った人が少なく、それも途中までで、テル

ニに入ったときは私たちだけでした。ここでは身分ある数人の人と太鼓を打つわずかな兵が門まで出迎えて、町の中で挨拶しましたが、それは形式的で、ベネデット（ベント・ロペス）神父の頼みに応じて行われたことです。知事と行政委員たちは上からの命令がなければ何もしないつもりだと、はっきり言いました。（中略）夕食は、大勢が集まれる広間に準備されていましたが、町には貴人たちがたくさんいるにもかかわらず一人も見えませんでした。

と述べられているように、場所によって、遣欧使節への対応にはかなりの差があったのである。

さらに、彼らを歓待した人々の中にも、彼らがどこから来たのか正確に知っていた人は、少なかった。

トスカナ大公あての書簡には「日本の島なるインドの公子四人渡来し」と、書かれていたり、モデナ文書館に残る帳簿には、「城内に滞在せる日本人と称するインドの紳士四名」、「インドの王たちの食卓用として」といった記録が見られる。使節は、ヨーロッパの人々に、ヨーロッパとキリスト教の栄光を再確認させる働きをしたが、日本と日本人をヨーロッパの人たちに分らせることは、困難だったのかもしれない。

次に、ヴァリニャーノが使節を派遣した三番目の理由、少年たちにヨーロッパとキリスト教のすばらしさを伝える役目を担わせようとしたことについて考える。

一五九〇年「天正遣欧使節記」（以下「使節記」と略す）という一冊の書物が出版された。使節の一人である千々石ミゲルが大村善前の弟リノ、有馬晴信の弟レオを相手に航海やヨーロッパでの見聞を三四回にわたって語る構成になっている。ヴァリニャーノがマカオで長期滞在を余儀なくされたのを機に編纂し、サンデにラテン語訳させたものとみられている。

なぜラテン語に訳されたのかといえ、当時ヨーロッパにおいて

公的な場や学術的な書物には、ラテン語が使われていたからである。ラテン語で出版することを通じて、アジアで積極的に布教活動を行っていたイエズス会の存在をヨーロッパに誇示するためであったと同時に、日本の信者たちに、ヨーロッパ事情を知らせ、『使節記』を読んだ信者を通じて、多くの日本人にヨーロッパとローマ教皇の偉大さを教えるためであった。それゆえ、この書物は、宗教・軍事・歴史・科学・風俗あらゆる点において、いくぶんかの誇張を伴って、ヨーロッパの優位さを説いている。

この著書について、ヴァリニャーノは後に、次のように語っている。

この本を書かせたのは、その士たちと一緒に再度日本へ赴任した私自身であったし、持ち帰った印刷機を使って発行させたのは、日本人にそのことを伝えるためであった。すなわちローマ教皇庁やキリスト信者である君主たちの懸念さに倣い、ヨーロッパの領主たちの偉大さを知り、また政界や宗教界の慣習や儀式がどれほど異邦人と日本の僧侶たちのそれと異なるものであるか、その相違を明らかに示すためであった。

このように、使節とともに持ち帰った印刷機も、帰国後ヨーロッパとキリスト教のすばらしさを日本に広めるための道具であった。少年たちの対話形式で書き進められているが、マカオでラテン語に翻訳されて出版されたときには、まだ少年たちは日本に戻っていなかった。『使節記』『対話』の冒頭に「私のもっとも愛する兄弟ミゲルよ、あなたやマンシヨやマルチノ、それにジュリアンがあらゆる人々の歓呼のどよめきのうちに、この有馬の城に入ってかられるのを眺めたときの、われわれの心のうれしさはいかばかりであったろう」と書かれているが、明らかに創作である。このことから、『使節記』は、ほぼすべてヴァリニャーノの手によるものだと考えられる。

ヴァリニャーノは、使節帰国後、四人の少年たちを中心に、ヨー

ロッパへの憧れ、ローマ教皇への畏敬の念を日本人に持たせ、日本人聖職者を養成することまで考えていたに違いない。『使節記』は、そのときの教材の一つにもなるものであった。ヴァリニャーノの、使節帰国後の日本人宣教師育成計画の一端をうかがい知ることができる。

高瀬弘一郎氏によれば、一五七八年イエズス会総会長はヴァリニャーノに宛てて、日本人を入会させ、これを積極的に宣教師に養成するよう指令しており、ヴァリニャーノは、日本布教長カブラルの反対を排して、教育機関の設置に着手した。実際、安土や有馬にセミナリオが設立され、伊東マンシヨたち四人の少年は、有馬のセミナリオから選出された。しかし、使節帰国後の一五九二年、ヴァリニャーノは、報告書の中で、日本人の評価をまるで修正し、この問題について後退してしまっているのである。

少年使節の成果を見たのちに、ヴァリニャーノの日本人に対する評価が下ったのは不明である。しかし、彼らの帰国途中に出された伴天連追放令などの影響もあり、日本人宣教師の育成は思ったようには進まず、一六一二年イエズス会総長から、日本人をあまり重用せず、ラテン語などの学問もそれに必要な程度の知識を与えるだけにせよ、と指令されるに至った。帰国後、少年たちとともに、豊臣秀吉との会見を果たしたのが、日本におけるキリスト教の礎を築くという本来の目的を達成できたと言いがたいのである。

使節と貿易

次に、ヴァリニャーノの立案した遣欧使節の四番目の目的である、「世俗的な救済策を手に入れるため」について考える。世俗的な救済とは、つまり資金援助のことである。

日本イエズス会が活動を続けていくために必要な資金は、どこから供給されていたのであろうか。わずかな喜捨もあったが、その資金のほとんどは、スペイン国王・ローマ教皇による資金援助と、イ

エズス会宣教師も関与する貿易活動による利益の二つでまかなわれていた。

まず、イエズス会が日本で布教活動をするには、どれほどの経費を要したのか見てみよう。ヴァリニャーノの『日本巡察記』から、予算の主な用途が次のようなものであったことがわかる。

我等（イエズス会員）、同宿、教会の世話をする人々、及び我等の修院で必要とする下僕を合わせ、吾人は毎年五百名前後を扶養している。これらの者がいづれも一カ所で生活するとしても、その経費は莫大であろう。我等は各地での経験により、これよりもはるかに人数が少ない学院一カ所においても、毎年一万、あるいは一万二千クルサードではほとんど生活してゆけないことを知っている。

さらに、修院や教会等の建築費、教会の装飾品の購入費、物資の輸送や宣教師の旅費、領主等への贈物、迫害を受けた者や貧者への施しなどが必要であった。その経費を国王・教皇からの資金援助と、自らの貿易活動によってまかなおうとしたのであるが、資金援助はどれぐらいあったのであろうか。

ポルトガル国王は布教保護権の制度に基づき、キリシタン教会の保護者としてこれの財政面の責任を負う立場にあった。ところが同国王が日本イエズス会に支給した年金は、高瀬弘一郎氏の研究によると、次の通りである。国王は一五七四年まではマラッカにおいて毎年六〇〇バルダオ（約五〇〇ドゥカド）を支給してきたが、この年に一〇〇ドゥカドに増額した。スペイン国王フェリペ二世がポルトガルを併合した際に、ゴアにおいて同じく一〇〇ドゥカドの年金を追加支給することにした。また、ローマからの援助は一五八三年以後四〇〇ドゥカドの年金がマドリッドにおいて支給され、一五八五年に一回だけこれが六〇〇ドゥカドに増額されたが、その後はまたこれが四〇〇ドゥカドに戻された。この支給状態や送金も確実ではなかった。

つまり、遣欧使節の大きな目的の一つであった国王や教皇からの資金援助要請は、成功したとはいえないのである。

それでは、もう一つの資金供給源である貿易はどうであったのだろうか。

従来、遣欧使節のことについて語るとき、宣教師の経済活動とは切り離して考えるきらいがあった。そのため、遣欧使節が美化され、あたかも神に導かれてローマに赴いたかのごとき言説まであらわれた。その原因の一つには、神に仕える神聖な宗教活動と、現世の利益を求める経済活動とを切り離して考えてしまっていたことによる。神父たちが必要に迫られてならなくともかく、必要以上に貿易で利益を得ることに對する違和感のようなものがあつたのか、遣欧使節を論じる際にも、宗教的・文化的側面が強調されてきた。

日本におけるキリスト教布教は、スペイン・ポルトガル両国が海外に進出した大航海時代の所産であることを忘れてはならない。両国が、積極的に勢力拡大を競った大航海時代に、カトリック布教活動も海を越えて世界に広がった。両国の国力を離れて、海外布教はありえないし、また両国の海外発展も、教会の精神的權威を後盾にしたものであり、しかもそれがローマ教皇の權威によって正当化されていた。

つまり、遣欧使節が実現されたのも、大航海時代の所産である。ザビエルやヴァリニャーノといった宣教師たちが日本で活動できたのも、スペイン・ポルトガルの勢力が日本にまで及んできたからにほかならない。両国の影響力がなければカトリック布教は不可能であり、日本での布教活動を、宗教的な視点からのみ理解しようとするなら、それは不十分といわねばならない。宣教師たちは、スペインやポルトガルの国家事業の一つとして日本布教を行ったのである。遣欧使節もその一つとして考えなければならぬ。

そう考えると、今まであまり注目されてこなかった「世俗的な救済策」が、いかに重要であるかがわかるであろう。日本への布教

が、イエズス会だけの事業ではなく、大航海時代を現出させた両国の国家事業と関係していると解釈すれば、国王・教皇は、布教を保護・支援する義務があり、ヴァリニャーノは日本におけるその成果を披露するために、少年たちをローマに派遣した。そして、さらなる資金援助の約束を取り付けようとしたのは当然のことであった。

また、スペイン・ポルトガルの貿易活動にイエズス会が参加し、自分たちの活動資金を得ることも、完全に否定されるべきものではなかったのである。布教と貿易とは密接に関係しているのである。

よって、かれらが、貿易についていかに考えるかということは、単に貿易や商業活動についてばかりでなく、布教政策そのものについてどう考えるかということにつながるものであった。

宣教師たちの中には、大きく分けて、二つの見解があった。一つは、イエズス会創立の精神を堅持して、修道士として清貧を貫くという考え方である。もう一つは、日本の現状に即して臨機応変に考慮し、方針を決定するという考え方である。

ヴァリニャーノは後者の考えであった。ヴァリニャーノは、遣欧使節が日本に帰国するに際して、イエズス会総会長に、次のような書簡を書き送っている。

日本キリスト教界と当市の利益のために今年行わなければならないことは、生糸を積まずに船を日本に送り、その船で私が日本の貴人たちと一緒に、副王が関白殿に送る書状と進物を持つていくことであり、いまひとつは、当市が別の人物を関白殿の許に送って次のように通告することである。すなわち、今年は例年のように生糸を送ることはしない。それは閣下がポルトガル人に無法を働き、パードレたちに迫害を加え、教会を破壊し、生糸を望みのままの価格で買い取り他に売ることを許さなかったからである。もしも閣下が従来どおりポルトガル人が生糸その他の商品をもって渡来することを望むなら、再びパードレたちに日本滞在と教会建設を許可しなければならぬ。と

いうのは、ポルトガル人はキリスト教徒であり、パードレと教会なしには生きてゆけないからである。さらにポルトガル人が従前どおり誰にでも売りたい相手に生糸を売ることができるよう彼らに自由を与えなければならぬ。このことを通告するたもと副王が送った書状と進物とを届けるためにのみ今年本船が渡来したのであって、もしも閣下が以上の要求事項を履行しなかつたら、もうこれ以上日本に渡来しないつもりである、と。このように通告すれば関白殿が折れてくることは確かであろう。このナウ船が日本に行かなければ多大な利益と名誉とを彼が失うからであり、また日本中が決起して、彼の悪口を言い立てるからである。

ここで書かれている「生糸を望みのままの価格で買い取り、他に売ることを許さなかつた」とは、豊臣秀吉が、一五八八（天正一六）年夏、長崎にポルトガル船が渡来した際、小西行長の父小西立佐に二〇万クルサド以上の金を持たせて長崎に派遣し、権力を背景に九〇〇ピコにも上る生糸を優先的に、不当な安値で買い占めさせたことを指している。この九〇〇ピコという生糸量は、通常ポルトガル人が例年日本にもたらした生糸量から判断して、おそらく積載していた生糸のほとんどであると言われている。

これは、従来の長崎貿易の慣行を破る全く異例のものであり、そのことは当然マカオ側にも大きな動揺を与えた。秀吉に対し、ヴァリニャーノが「もしも閣下が従来どおりポルトガル人が生糸その他の商品をもって渡来することを望むなら、再びパードレたちに日本滞在と教会建設を許可しなければならぬ」と述べており、貿易と布教とは一体であることを強く認識していることがわかる。自分たちを安全に日本に上陸させ、教会を存続させなければ、貿易をやめるといふ一種の恫喝にも似た主張がなされている。

ヴァリニャーノは、日本での布教活動を通して、慢性的な資金不足に悩み、経費をまかなうために、「今後は、日本において収入を

増加させるか、この貿易を大いに拡大するか、あるいは日本での仕事をやめるか、そのいずれかが必要である」と結論づけ、「膨大な費用をまかなう方法としては、イエズス会には毎年支那から来る船による貿易以外にはない」と断言する。

日本イエズス会の貿易は多岐にわたったが、その主要な部分はマカオ・日本間の生糸貿易であった。これは、マカオを基地にして、中国産の生糸を日本に輸入するポルトガル人の貿易活動に参加する形で行われた。しかし宣教師が貿易に従事するのは、問題があると考える者もいた。

日本布教長を務めたカブラルは、イエズス会総会長あての書簡で、次のように述べている。

日本の改宗事業のために必要であるとの口実の下に、われわれが少しづつ足を踏み出し、純粹に必要あって、極めて慎重かつ細心に始めたことが、必要というより、むしろ貪欲さから行われるようになること、つまり修道士にふさわしい程度をこえて恣に行われるようになるのを非常に恐れる。というのは、すでに今年、何人かのパードレが、個人でもって、貧者のためとか教会を修繕するためとか言って、二〇ピコ、一〇ピコと生糸を入手した。この生糸は直ちにその地で転売されたが、このようなことも非常に悪いことだと思われた。また何人かのパードレは、これと同じ口実で、少額ながらこの地で投資するために金を送ってきた。もしも初期のうちに防いでおかないと、これが嵩じて非常に悪事を働くものも出てこよう。

また、カブラルは同じ書簡の中で

教会の門をくぐって人々はミサにあずかるが、同時にその傍らの門から生糸や綿織物の梱が運び込まれ、良心問題やその他の霊的な事柄のために来た人々が、中国の財貨や商品が、プロクラドル立会いの下に梱にされているのを目撃する、というようなことがたびたび起っているからである。このようなこと

は、現在の管区長（ヴァリニャーノ）から多くの許可と権能を得て行われているので、カーザ内に慎みを欠く空気を作り出し、その上、少なからず非教化の原因にもなっている

と、ヴァリニャーノの貿易推進策を批判している。長崎の教会内部で、堂々と貿易品の梱包作業が行われていたのである。これを見た信者たちがどう思うだろうか、清貧を旨とした教会ではありえない光景であると、カブラルは嘆いている。

カブラルだけではない。マカオからもイエズス会総会長あてに、イエズス会の貿易に深く関与する様を批判する書簡が届いた。

現在は、人員やカーザの数が増えたので、経費は増しはしたが、必需品や日常の衣食に事欠くようなことはないと思はう。もつともそれは、巡察師が贈る進物が今ほどでなければ、の話である。この進物によって、彼はその名にふさわしい地位にあるということを示している。もつとも日本の領主たちは、贈り物を受け取る資格をそなえてはいるが。しかし、日本に対しては、すべてが少ないと巡察師は考えている。それならば、そのためにイエズス会の信用と評判を落とすよりは、それを削減したり、やめたりするほうが正しいと思われる。

（イエズス会の）評判は、この貿易によって失われつつあり、しかもそれはますます甚だしくなつてゆくであろう。そして貿易によって資産を増やしたいという欲望がわれわれに嵩じてゆくことであろう。

先ほど述べたように、貿易についていかに考えるかということ、布教政策をどう考えるかにつながっていた。貿易については賛否両論あったが、布教活動資金を日本で賄おうという姿勢は希薄であった。彼らは日本国内で資金を調達することに、全く期待していなかったのかもしれないが、国王や教皇からの寄付にしろ、生糸貿易にしろ、遭難や略奪により、いつ援助が途絶えるかわからないものに頼らざるを得なかったことが、この時代にキリスト教が日本に

根付かなかった要因の一つかもしれない。

それでは、この問題に関して、イエズス会総会長はどう考えていたのであろうか。

高瀬弘一郎氏によると、一五八五年十二月にヴァリニャーノに送った指令の中で、総会長は、日本イエズス会の生糸貿易を禁止している。しかし、二年後には貿易が最許可されており、その後、歴代総会長は基本的には日本イエズス会の生糸貿易を承認する方針をとった。やはり、現実的に考えて、貿易に依拠しなければ、日本での布教活動はままならないものであると総会長も認識したのであろう。

ヴァリニャーノは、来日二年目の一五八〇（天正八）年から翌八一年にかけて、白杵・安土・長崎で協議会を開いた。そして、八二年一月、彼は協議会の諮問に対して決裁を下した。この三ヶ所での協議会と決裁を集大成したものが、「日本イエズス会第一回協議会と、東インド巡察師A・ヴァリニャーノの裁決」といわれるものである。そこでの諮問第十三「日本の物質的維持のために努力しなければならぬ解決策」に、次のような記述がある。

諮問第十三 日本^①の物質的維持のために努力しなければならぬ解決策

第一は、全員の意見はそれに一致したが、ローマで度々疑惑を抱かれ、否、総会長により我々が生糸に携わっている貿易を全面的に廃止せよと命ぜられたので、日本のパードレ全員の希望は、もし可能ならば、この生糸貿易その他の貿易をすべて廃止することである旨を総会長現下^②に報告すべきである。第一の理由は、我々はそれが我々の誓願と会憲に違反することを知っていること、第二の理由は、極めて危険で不確実であること、多くの憂慮と労苦を伴うこと、そして他の方法による維持を獲得するほうが全員にとって善いからである。しかし、経費は多く定収入は皆無であるので、貿易を廃止し得る救済手段は、現

在のところない。したがって、イエズス会もキリスト教界も、現在のところ、他の手段によって維持することは不可能である。そして日本が他の手段によって補給を受ける前にこの貿易を廃止するならば、日本からパードレを奪いキリスト教界と改宗の問題をも放棄しなければならぬ。

第二の点は、これも全員が一致したところであるが、従来日本で収められたすべての成果およびそれを維持するためには、毎年少なくとも八〇〇〇クルサードは欠かせないということを総会長、教皇聖下、およびポルトガル国王にきわめて明確に知らせるということであった。：

第三の点は、これも全員の一致したところであるが、日本のイエズス会と全キリスト教界は物質的維持の不足のために滅亡するという極度の危険を、同じように教皇聖下、総会長、および国王殿下に知らせるということであった。イエズス会は中国から日本へもたらされる生糸に僅かな資産を投資して利益を得る以外には、日本になんら定収入を持っていないからである。：
：全員は以下の結論を下した。すなわち、日本がさらされている深刻な困窮と危険に鑑み、利益をもたらしえる明白な救済手段となり且つ日本を救済すべき真の対策となるよう、巡察師自らローマへ赴いて総会長に現状をすべて説明し、また国王殿下と教皇聖下にも日本に対して何らかの対策を求めするために報告すること。なぜなら、教皇聖下と国王殿下は、日本の現実と現状に関する報告を受けた後で、適切な対策を必ずや巡察師にお与え下さるに違いないからである。巡察師が行けない場合には、日本の最も重要なパードレの中から一パードレをローマへ派遣して、上述の方々と総会長にこれを報告すること。
この協議会が、八〇年から八一年にかけて、つまり、遣欧使節が出発する直前に開催されていることに注目したい。ここで議論されている内容は、次の三点である。

①もし可能ならば、この生糸貿易その他の貿易をすべて廃止することである旨を総会長宛下に報告すべきである。しかし、経費は多く定収入は皆無であるので、貿易を廃止し得る救済手段は、現在のところない。日本が他の手段によって補給を受ける前にこの貿易を廃止するならば、日本からパードレを奪いキリスト教界と改宗の問題をも放棄しなければならぬ。

②日本で収められたすべての成果およびそれを維持するためには、毎年少なくとも八〇〇〇クルサードは欠かせないということを経会長、教皇陛下、およびポルトガル国王にきわめて明確に知らせる必要がある。

③日本のイエズス会と全キリスト教界は物質的維持の不足のために滅亡するという極度の危険を、教皇・国王・イエズス会総会長に知らせなければならぬ。

以上の議論を経た結論は、巡察師自らローマへ赴いて総会長に現状をすべて説明し、また国王陛下と教皇陛下にも日本に対して何らかの対策を求めるために報告しなければならぬ、というものであった。

そして、諮問第十三に対するヴァリニャーノの裁決は、次の通りであった。

権威があり、それを十分に説明しすべて簡潔に果し得る人物を介して、国王陛下と教皇陛下にこのことをすべて詳細に報告すべきである。というのは、私が衷心から思っているところによれば、日本は物質面の不足から自滅するという極度に危険な状態にある。

ここでさらに遣欧使節に課せられた役割が明確になる。ヴァリニャーノは、国王・教皇・総会長に生糸貿易の存続を容認させ、更なる援助を得るために日本の現状を詳細に報告することを目的として、ローマに赴くはずであった。その際、日本での布教の成果を示すものとして、少年たちが選ばれて、ローマ教皇への謁見まで果た

したのであった。

ただし、ヴァリニャーノはイエズス会総会長の命により、インドのゴアで少年たちと別れ、自らローマに向うことはできなかった。そのため、ヴァリニャーノの意図することが十分に伝わらず、遠く異国の地から少年たちがローマを訪れ、教皇に謁見したことがクローズアップされる結果となった。

ヴァリニャーノは、総会長あての書簡で、次のように述べている。

今から八日前に、当地コチンにおいて私は、本年と同じ年の一月四日付け宛下の書簡を受け取った。その書簡の中で宛下は、菅区長職としてインドに留まるよう、私に命じられている。この命令を受けて、私は非常に困惑した。それには幾多の理由があるからである。：

私が「ヨーロッパに」赴こうと切望し、また「そうするよう」に「駆られている二つめの理由は、日本の維持のために、世俗的な救済策を手に入れることであった。というのも、その救済策がないために、かの地方「日本」のイエズス会とキリスト教界の全体が、著しい危機に陥っているからである。：

四つめの理由は、この日本人の少年たちを「ヨーロッパまで」同道してゆくことであった。というのも、少年たちが私と一緒に行くならば、彼らは私が切望していることの全てと、また特に日本の世俗的な救済策とを大いに助けてくれるであろう、との結論が下されたからであり、またそれは非常に確実だからでもある。：しかし、もし私が「ヨーロッパに」赴かないならば、どのようにして以上の事柄を首尾よく行なったらよいのか、私には分からない。：

ヴァリニャーノの困惑がよく伝わってくる文面である。この困惑ぶりからも、遣欧使節は周到な準備がなされたものではなかったことを読み取ることができる。イエズス会総会長やローマ教皇が、日

本から少年たちがヨーロッパに向かっていることをいつ知りえたのかは定かではないが、ヴァリニャーノが、総会長や教皇の了承を得て遣欧使節を派遣したのではないという事は確かであろう。

書簡の中にある「私が「ヨーロッパに」赴かないならば、どのようにして以上の事柄を首尾よく行なったらよいのか、私には分からない」というヴァリニャーノの危惧は、結果的に的中した。総会長は、少年たちの訪問により教皇や国王から資金援助の約束を取り付けたので、生糸貿易は必要ないと判断し、一五八五年十二月に日本イエズス会の生糸貿易を禁止したので。

しかし、ヴァリニャーノは、ヨーロッパから日本に資金が送られてくることは、不安定かつ不確実であることを自らの航海の経験などから認識していた。だからこそ、総会長へ生糸貿易存続の必要性を訴え続け、二年後には貿易が最許可されたのである。ヴァリニャーノは、世俗的救済の必要性と、継続して生糸貿易を行うことを許可してもらうために、ローマに赴くことを計画し、その際に日本布教の成果を示すものとして何が最も効果的か考えた。その結果、日本を離れる直前になって、セミナリオで学ぶ少年たちを帯同することを選び、紆余曲折を経て、伊東マンシヨをはじめとする四人の少年が選ばれたのであった。

最後に、一五九〇（天正一八）年、島原半島の加津佐で開催された日本イエズス会第二回全体協議会から、遣欧使節についてマンシヨたちの帰国後、宣教師たちがどのように考えたかを見てみよう。

諮問第十四「ローマで研修のために日本人イルマン若干を派遣すべきか否か」において、次のような議論がなされた。

これはイエズス会の発展とイエズス会会則の完璧な保持及び本協議会で協議された諸理由により、ヨーロッパのパードレやイルマンと日本人との間の真の一致にとって、卓越した方法だとみなす点で全員一致した。

この派遣の実施は当然きわめて望ましいことではあるが、以下の理由により非常に困難である。第一の理由、きわめて長期、危険な行旅の距離の故に、少数のイルマンがこの行旅に派遣されるならば、かかる長期の間に容易に死亡しがちで母国語を忘れる可能性があるので無用だろう。：日本で最も優秀且つ期待される人物から選抜しなければならないので、日本に人材が極度に不足するであろう。

第二の理由、往復期間およびローマに滞在して研修しなければならぬ期間に学識を深めてパードレとなるには、少なくとも十二年ないしは十四年を必要とするであろう。：また彼らが帰国する折に役立つような言葉を保持するのにも大きな支障が生ずる。なぜなら、日本語で巧みに説教し書簡を書きこなすためには、通常語る日常語を解さなければならぬだけではなく、日本の文学や書籍にきわめて困難な特別な研修をする必要があるが、然らざれば、資格もなければ名声も博さないのである。：彼らがローマから帰国後にこれを学ぼうと思っても、それはあり得ないことであり、期待され且つローマから携えるべき名声を抱いて帰ることはないであろう。

つまり、日本人をローマに派遣することが、日本におけるキリスト教の発展に寄与するものであろうという事に関しては意見の一致をみた。しかし、現時点においては、危険を冒して、長期間ローマに滞在して研修を積むことに、積極的な意義を見出すには至らなかった。航海が危険であることや、多額の経費を要するという理由ばかりではなく、人材の面においても適任者がいなかったのである。

ローマで研修し、その後帰国して教義をわかりやすく説教するためには、外国語ばかりでなく、日本語においてもきわめて高い能力を有していなければならない。この能力は、ローマに派遣されるまでに培っておかなければならないものである。母国語としての日本語の能力が高くない者を、いくらローマに派遣して研修を積ませて

も、宣教師たちが期待したほどの成果をあげることは不可能なのである。マンシヨたちが帰国した後の協議会において、このような議論がなされたということは、遣欧使節はヴァリニャーノたちの期待に沿うものであったのだろうかという疑問も湧いてくるのである。

おわりに

本稿では、まず伊東マンシヨについて、彼がどのような出自であり、なぜ「正使」として常に使節団の筆頭に挙げられるのかを考察した。日本側に残る史料が少なく、彼をローマへと導いた宣教師たちの残した史料からも、出自を明らかにすることは現時点では困難である。今後もし引き続き、いたずらに顕彰するのではなく、新たな史料に基づいた議論が必要であろう。イエズス会文書館などに、遣欧使節に関する史料が眠っている可能性もある。

続いて、遣欧使節の目的について考察した。従来、使節の宗教的・文化的側面が強調されてきた。もちろん、印刷機などを持ち帰った文化的側面を蔑ろにすることはできない。しかしながら、まずによりも、遣欧使節は日本での布教活動を進めていく上で絶対必要な資金を得るため、それも生糸貿易により資金を獲得することを認めてもらうために行われたものであり、大航海時代の中でのスペイン・ポルトガル両国の国策とあわせて考えていくべき出来事なのである。

注

- (1) 『新編 新しい社会 歴史』(東京書籍) 八十三頁。
- (2) 『日本史B』(実教出版) 百五十八頁。
- (3) 『詳説 日本史B』(山川出版社) 百四十九頁。
- (4) 法華嶽薬師寺の天井板には、次のような言葉が書かれている

いる

奉造立天井一圓之 意趣者武運長久

弓前勝利諸勢之 軍兵守護一将之

幡箕譽名於顕 天下富敵退治

地方順治所望 成辨 仁同性女

所生愛子虎松女 虎千代麿虎次良磨

虎亀磨各各 息災延命一々

諸願皆令満足 故如件

天正三年亥乙南呂六日

伊東修理亮藤原朝臣祐青

- (5) アレッサンドロ・ヴァリニャーノ『アポロジヤ』第五章(結城了悟『天正少年使節―史料と研究―』純心女子短期大学長崎地方文化史研究所、一九九三年所収) 一八五頁。

- (6) 「一五八三年十二月一五日付、ゴア発、ヴァリニャーノのグレゴリオ十三世宛て書簡」(苦小牧駒澤大学国際文化学部高橋裕史先生に翻訳していただいた)。

- (7) 「一五八五年ローマ発、ダイエゴ・デ・メスキータ神父のダイエゴ・ヒメネス神父宛て書簡」(結城了悟『新史料天正少年使節』(キリシタン研究第二九輯) 南窓社、一九九〇年所収) 三三三頁。

- (8) 「一五八七年一〇月一五日付、生月発、ペドロ・ラモンのイエズス会総会長宛て書簡」(高瀬弘一郎監訳『イエズス会と日本 一』(『大航海時代叢書』第Ⅱ期六) 岩波書店、一九八一年所収) 三七―三八頁。

- (9) 『宮崎県史 通史編 中世』(宮崎県、平成十年) 九四七頁。

- (10) 前掲(8)、三七―三八頁。

- (11) 「天正一〇年一月一日、大友宗麟よりイエズス会総会長宛書簡」

- (12) 渡辺澄夫「大友宗麟のヤソ会総会長宛書状の真偽について」

〔大分県地方史〕第六二号)において、宗麟の花押の違いから、総会長宛ての書簡は宗麟によるものではなく、イエズス会に近い者によって作成されたものであると結論付けている。

- (13) 「一五八二年二月一日付、長崎発、ガスパル・コエリユ師よりイエズス会総会長宛、(一五八一年度)日本年報」(松田毅一監訳「一六・一七世紀イエズス会日本報告書」第三第六卷所収)三頁。

- (14) ルイス・フロイス『日本史』一一、第一一〇章(第三部四十三章)二五九頁。

- (15) 前掲(13)、二六〇―二七頁。

- (16) 松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』(風間書房、昭和四二年)五九八―五九九頁。

- (17) 「一五八五年八月一日付、デイエゴ・デ・メスキータ神父の書簡」(結城了悟『新史料 天正少年使節』(キリシタン研究第二九輯)南窓社、一九九〇年所収)三五頁。

- (18) 渡辺澄夫「大友宗麟のヤソ会総長宛書状の真偽について」(『大分県地方史』第六二号)。

- (19) 松田毅一『大村純忠伝』(教文館、一九七八年)一五八頁。

- (20) 前掲(8)、四〇―四二頁。

- (21) 「一五八三年二月一日付、ゴア発、ヴァリニャーノよりエーヴォラ大司教ドン・テオトーニオ・デ・ブラガンサ宛て書簡」(松田毅一監訳「一六・一七世紀イエズス会日本報告集第三期第六卷」所収)一七二頁。

- (22) 「一五八三年一〇月二八日付、コチン発、ヴァリニャーノよりイエズス会総会長宛て書簡」(苦小牧駒澤大学国際文化学部高橋裕史先生に翻訳していただいた)。

- (23) 「一五八五年五月一日付、ペルージャのジヴァンコラ・デ・ノスタリスよりイエズス会総長クラウディオ・アクア

ヴィヴァ宛て書簡」(結城了悟『新史料 天正少年使節』(キリシタン研究第二九輯)南窓社、一九九〇年所収)九五頁。

- (24) 「メスキータよりイエズス会総会長宛て書簡」(結城了悟『新史料 天正少年使節』(キリシタン研究第二九輯)南窓社、一九九〇年所収)七四頁。

- (25) 「一五八五年六月五日付、テルニ発、イッポリト・ヴォリア神父よりイエズス会総会長アクアヴィヴァ宛て書簡」(結城了悟『新史料 天正少年使節』(キリシタン研究第二九輯)南窓社、一九九〇年所収)一〇六頁。

- (26) イタリアフロレンス文書館蔵「一五八四年三月一日付、マッテオ・フォルスタニよりトスカナ大公宛て書簡」(『大日本史料』第一一編別巻之一 天正遣欧使節関係史料一所収)一七一頁。

- (27) 「イタリアモデナ文書館文書 一五八五年パンの帳簿」(『大日本史料』第一一編別巻之二 天正遣欧使節関係史料二所収)四九頁。

- (28) 「イタリアモデナ文書館文書 一五八五年日用品帳簿」(『大日本史料』第一一編別巻之二 天正遣欧使節関係史料二所収)五五頁。

- (29) 日本語訳は、泉井久之助他共訳『デ・サンデ天正遣欧使節記』(新異国叢書第一輯第五卷)として、雄松堂出版より出版されている。

- (30) アレッサンドロ・ヴァリニャーノ『アポロジア』第五章(結城了悟『天正少年使節―史料と研究―』純心女子短期大学長崎地方文化史研究所、一九九三年)一八四頁。

- (31) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』第一部第一章(八木書店、平成一三年)一九―二二頁。

- (32) ヴァリニャーノ著 松田毅一他訳『日本巡察記』(平凡社、昭和四十八年)一四〇―一四二頁。なお、イエズス会が日本

での布教活動にどれほどの経費を必要としたかについては、高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』第二部第一章「キリシタン教会の経費」(岩波書店、一九七七年)を参照。

A. ヴァリニャーノの裁決」(井手勝美『キリシタン思想史研究序説』ペリカン社、一九九五年)五三一～五三二頁。

(33) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』第一部第一章

(八木書店、平成二三年)八～一〇頁。

(34) 「一五八九年七月二八日付、マカオ発、アレッサンドロ・ヴァリニャーノよりイエズス会総会長宛て書簡」(高瀬弘一郎監訳『イエズス会と日本 一』(『大航海時代叢書』第Ⅱ期六)岩波書店、一九八一年)六二頁。

(35) 同右、一四二頁。

(36) 同右、一四八頁。

(37) 「一五八四年一〇月六日付、マカオ発、フランシスコ・カブラルのイエズス会総会長宛て書簡」(高瀬弘一郎監訳『イエズス会と日本 一』(『大航海時代叢書』第Ⅱ期六)岩波書店、一九八一年)一九頁。

(38) 「一五九二年一月二十三日付、マカオ発、フェルナン・マルティンスのイエズス会総会長宛て書簡」(高瀬弘一郎監訳『イエズス会と日本 一』(『大航海時代叢書』第Ⅱ期六)岩波書店、一九八一年)九五～九六頁。

(39) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』(岩波書店、一九七七年)三三九～三四一頁。

(40) 「日本イエズス会第一回全体協議会と、東インド巡察師A. ヴァリニャーノの裁決」(井手勝美『キリシタン思想史研究序説』ペリカン社、一九九五年)四一六～四一八頁。

(41) 同右、四五四頁。

(42) 「一五八三年一〇月二八日付、コチン発、ヴァリニャーノのイエズス会総会長宛て書簡」(苦小牧駒澤大学国際文化学部高橋裕史先生に翻訳していただいた)。

(43) 「日本イエズス会第二回全体協議会と、東インド巡察師